大垣の水系基盤からみた近代都市マネジメント

岐阜大学　学生会員　○北田寛明
岐阜大学　正会員　出村嘉史

1．はじめに

治水や利水技術の発展により，かつて水害の危険性が高く未開発であった地においても，都市開発が進み多くの市街地が拡大した．岐阜県大垣市もその一例である．大垣は，大規模な輪中都市である一方，江戸時代には城下町であり，また舟運により商業地として栄えた町である．近代に大垣は工業化が急速に進展し，城下町都市から工業都市へと変貌した．[1)]

1911（明治 44）年に木曽川下流改修工事が完成し，外水氾濫を改善すると，大正後期から昭和前期にかけて悪水排除のための木曽川上流改修工事が行われ，浸水被害が激減し都市的発展をとげてきた．[2)]しかし，水系基盤整備が都市発展にどう関係するのか，そのメカニズムについては明らかにされていない．

本研究は，揖斐川右岸の大垣以南の耕地および市街地の広い領域を対象とする（図-1）．目的は，支派川改修工事や用排水改良事業などの水系基盤が整備される過程に着目し，それを推進した立場が行った都市運営と近代大垣の都市発展との関連を解明することである．多部門に亘る複雑な事象を把握するため，各立場が遺した当時の文献資料を収集・解読し，整理する．

2. 関係する立場の整理

1890（明治 23）年に水利組合条例が制定され，用排水を担当する普通水利組合と堤防施設などの水害防御を目的とする水害予防組合が全国に形成される．さらに 1908（明治 41）年には法人としての水利組合の設立を認めた水利組合法が制定され，組織に独自の財政基盤を持つことになり事業の推進力が強化された．[3)] 1932（昭和 7）年に岐阜縣内務部土木課が発行した『土木概要』[4)]には，大垣における普通水利組合として，「鵜森・福束輪中・池尻埋樋管・池田用水板堰・柿ノ木戸・與福地用水樋管・山王樋」，水害予防組合として，「高須輪中・多藝輪中・瀬田輪中・大垣輪中・揖斐川以東・平ノ井」と記載があり，周辺に林立する組合の存在が確認できる．水利組合は治水事業の実現を決意し，大正後期から昭和初期にかけて，支派川改修の国庫補助獲得運動を行っていた．

農業基盤としての土地改良の視点を主とする立場がある．1899（明治 32）年に制定された耕地整理法は耕地の区画を整理し，労働の生産性を高め，農業経営に効用を発揮することが狙いであった．しかし，1909（明治 42）年に全面改正され，用排水事業による土地改良へと目的がシフトする．国庫補助の制度も整えられ，用排水改良事業については農林省が主導権を持っていたと考えられる．

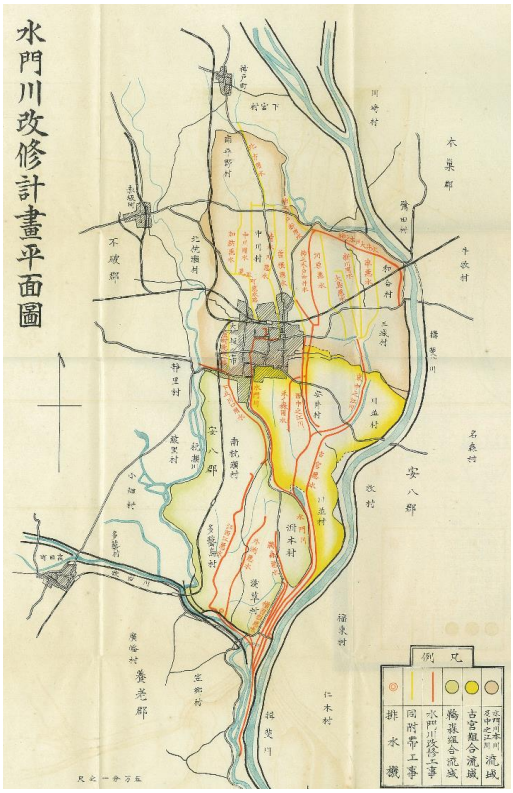

図-1　水門川改修計畫平面図

次に，木曽川・長良川・揖斐川を分流した木曽川下流改修工事に続く，木曽川上流改修工事に関連付けられた内務省の立場がある．農林省に 5 年遅れて内務省が国庫による半額補助を実現した支派川改修事業（1928 年以降）が焦点となる．

農林省と内務省の両省は，中小河川に対して同様の施策を実施したことから，互いに権限について整理が必要になり，この進展が土地改良事業に大きく影響しているものと考えられる．

最後に市の立場であるが，1918（大正 7）年の市制施行直後の市会議員は，半数以上が大垣商業会議所議員を務めた人物であった．[5)]このことから，大垣の自治の中心は商工者だったと考えられる．大垣市という組織の立場を利用して，商工者が大垣の政治に関与していたと考えられる．彼らが排水や利水にどのような視座を持っていて，それが都市の形成へどのように影響していたのかということも視点となる．

3. 支派川改修工事

明治改修といわれた三川分流の効果をあげるため下流改修の約 10 年後，1921（大正 10）年度から工費 2,000 万円の 10 ヶ年継続事業で三川の他，牧田川・藪川およびその支川を合わせて改修工事に着手した．その後，

表-1 木曽川水系における支派川改修工事

承認	河川名	予算額（円）	関連支川
昭和3年5月第55議会	犀川	2,117,900	犀川，五六川，中川，天王川，長護寺川，板尾川，糸貫川
	三水川	795,000	三水川，花田川
	牧田川	1,908,000	牧田川上流，小畑川，金草川
計	犀川他2ヵ川	4,820,900	13河川
昭和3年12月第56議会	境川	940,200	境川，大江川，荒田川，論田川
	鳥羽川	511,000	鳥羽川，伊自良川
	粕川	795,000	粕川
	水門川	742,000	水門川
	杭瀬川	1,015,400	杭瀬川，相川，大谷川，沼川，色目川
	津屋川	224,700	津屋川
計	境川他5ヵ所	4,228,300	14河川
合計		9,049,200	27河川

工期を延長して20カ年継続事業となり，さらに本川の改修工事の施行に伴い，犀川・三水川・牧田川上流・境川・鳥羽川・粕川・杭瀬川・津屋川および水門川などの支派川改修工事に加え，総工事費2,412万7,603円と改訂した．上流改修工事の目的は，悪水の停滞を防ぐことと，作物の水腐れの被害を免れることであった．関係水利組合が国庫補助獲得に向けて運動する一方，岐阜県議会も1926（大正15）年12月に意見書を可決して内務省に提出し，1928（昭和3）年5月の第55臨時議会で緊急着手を要する犀川他2川の支派川改修を木曽川上流改修の付帯工事として1/2の国庫補助予算が成立した（表-1）．これに引き続き，同年度12月に境川他5川の改修工事費が認められた．[6] これらは，関係水利組合や県が，国（内務省）に陳情した結果であった．

4. 水門川改修工事

上流改修の付帯事業として認められた支派川改修工事の一つに，水門川改修工事がある．水門川は大垣市街地を流れる揖斐川水系の河川であり，悪水河川である．同時に，大垣から水門川及び牧田川，揖斐川を経て伊勢湾に通ずる水運の動線として，前近代から利用されてきた．沿線の灌漑用水にも利用されるなど大垣の生命線ともいうべき重要水路であった．[7]

工事の概要は，排水機を設置し，悪水を排除することと，水門川を浚渫することであった．工事の完了により，水系基盤と鉄道とが連携し，鉄道で大垣駅まで運ばれた物資を水門川経由で桑名・四日市まで送ることが可能になった．

『大垣商工時報』は大垣商業会議所（昭和3年から大垣商工会議所）が大正2年から昭和18年の間発行した月刊会報誌であり，ここから当時の大垣の商工者らの考えが把握できる．大垣商業会議所の会頭であり元士族であった戸田鋭之助は，「之ガ完成ノ暁ハ當地方産業界各部門ニ亘リ甚大ナル効果ヲ資スベキヤ」[8]と述べており，改修工事に対する商工者からの期待が感じられる．

また，大垣市市会議員であった木村作次郎は市議会で，以下のように語っている．[9]

> …水門川改修ニ付實ハミミヅ川ノ未着手分ガ三十萬圓程アル之ハ公デナイカラ縣ヲ通ジテ秘密裡ニ當方ヘ貰フ様シテ速ニ着手スルコトヽシタイ既ニ内務省ハ了解シテ居ル…

ここから，ある立場にとって水門川の改修が，他の川を未着手にしてでも速やかに工事を実施させたい重要な内容を含んでいたことが分かる．この発言者である木村作次郎は，1938（昭和13）年10月，大垣輪中水害豫防組合會第一區議員の選挙で，次点[10]として名前が挙がる人物であり，治水を司る組織の動向と無関係ではなかった．市議会における水門川改修に対する発言の多くは，木村作次郎によるものであった．

5. おわりに

古来，揖斐川出水の度に大垣の人々はその水害を被り，悲惨の状況を極めた．しかし，支派川改修工事や用排水改良事業により，被害が激減したことに加え，生活用排水や工場排水などの近代都市にとって欠かせない機能が備わっていった．では，誰がその整備を推進したか．

商工者が多数占める大垣市会議員の中で，治水対策である支派川改修工事に対し，積極的に推進する立場が存在した．商工者や農家の利害を含みつつ，また別の立場から事業を推進した理由は何であったか．この地域が一様の都市基盤を整える過程を説明する上で，鍵となるトピックになると考えられる．

今後は，用排水改良事業に焦点を当て，計画内容や手法，関係する立場を探る．そうすることで，一連の事業に関連する各立場のビジョンと，それらの関係を把握できるため，どのような立場が都市の運営を主導し，それがいかにして大垣の都市発展に寄与したかを解明できると考える．

参考文献

1) 大垣市：大垣市史資料編近代，2009
2) 伊藤安男：治水思想の風土―近世から現代へ―，古今書院，1994
3) 出村嘉史，長谷川真穂：岐阜市・稲葉郡の水系基盤形成（1920-1935），土木史研究講演集 35，237-240，2015
4) 岐阜縣内務部土木課：土木概要，1932.7
5) 大垣市役所：大垣市史 上巻，1930
6) 東海農政局木曽川水系総合農業水利調査事務所：木曽川水系農業水利誌，社団法人農業土木学会，1980
7) 岐阜縣：水門川改修工事計畫説明書，1932.12
8) 大垣商工会議所：大垣商工時報，西濃印刷株式会社，1932.12
9) 大垣市議会事務局：第三回市会議録，1941.3.8
10) 大垣商工会議所：大垣商工時報，西濃印刷株式会社，1938.10